# チューインガム

源　桃子

右手に食料品を入れたレジ袋、左手に友人から貰った土産を入れた手提げバッグを持った私は、ずっと噛みっぱなしで清涼感の抜けたチューインガムを歩道わきの叢に向けてプッと吐き出した。ところがあいにく右のローヒールの靴に貼りついてしまった。

両手が塞がっていたとは言え、出来心でガムを吐き棄てたことを悔いた。

ガムの付いたつま先を草で拭おうとしてこすりつけると、柔らかいせいか取れるどころか反って面積は広がってしまった。こげ茶色の靴の右側の先だけに白い斑模様ができた。

仕方なく私は荷物を道端に降ろし、ティッシュペーパーを出そうとして手提げバッグの中を探った。

友人からの土産の下にあるティッシュを取り出そうとした途端、ポーチが飛び出してしまった。ボール状に膨らんだポーチはあっという間に傾きのある側溝の蓋の上を転がった。そしてポーチは側溝の蓋の継ぎ目と継ぎ目を合わせた部分の穴をめがけて転げ出し、私の視界から消えた。穴から水の流れは感じられたが暗くて中は見えなかった。

きっとどこかに留まっているに違いないと思い、手提げバッグだけを持って川に続く水路をたどった。側溝のぶ厚い蓋を持ち上げる力は到底なかった。

ポーチの中には車の鍵のほかに自宅の玄関と勝手口の鍵、それにその足で寄る予定だったマンションの鍵、つまり４つの鍵とフィットネスクラブの会員証を入れた蝦蟇口が入っていた。４つの鍵のうち２つは複製の出来ない高価なものだった。

眉間の皺をさらに深くして怒鳴る夫の顔が目の前に大きく迫ってくる。

ともあれ、車の鍵も無いのだから、駐車場に向ってもしょうがないのだ。電車と、バスかタクシーで帰るしかなかった。

さっきの場所まで戻ると、食料品の入った袋は無くなっていた。

僅か七～八分内の出来事だった。パニックで目が

クラクラした。ともかく駅まで歩いた。誰かが交番に届けてくれたか、いやそんなことは考えられない。、味噌やこんにゃく、りんごなど重いものばかり入った袋なのだ。駅のロータリーに着くと、赤い回転灯の交番の存在がいつもよりはっきりと目に飛び込んできた。食料品よりも鍵の入ったポーチを失くしてしまったことの方を優先すべきなのだが、警察に子細を説明するのは厄介だし、第一、四つの鍵が何処何処のもので形状は？なんて聞かれるのも嫌な話である。遺失物届けを出してみたにせよ戻ってくる可能性が皆無に等しいのは経験済みである。いっそのこと泥にまみれたポーチは掬い上げられ、ごみとして廃棄されることを願うばかりである。

交番を窺うと警官が机で書きものをしていた。

「ごめんください」

引き戸を開け、中に入ると、反射的に白いレジ袋に目が行った。私の袋が届いていたのだ。

袋の中の品物は何か？の問いに答えられたので、簡単に書類に記入しただけで品物は渡された。

「規則ですから、御礼については相手の方と話し合って下さい」

と、警官は相手の電話番号を書いた紙を渡してくれた。

交番を出て駅前のベンチで早速拾い主に電話をかけた。

「…もしお近くにいらっしゃるようでしたらこれからお礼に伺いたいのですが」

と言う私に、

「お気持ちだけで十分ですから」

と中年らしい女性の声が返ってきた。

頭の中は、流してしまった鍵の入ったポーチのことでいっぱいだったが、あの重い袋を交番まで届けてくれた女性にお礼をしなければという思いで同じ言葉を繰り返した。

だが、

「本当にけっこうです。それに私が届けたのはあの袋だけですから」

五キロか六キロはあろうと思われる重い荷物をわざわざ届けてくれたその女性に謝意を告げ電話を切った。

また右手に重いレジ袋と左手にバッグを提げ、駅の改札を通り階段を昇ってホームのベンチで電車を待った。

夫に電話をしようかと思った。もし帰っていたと

しても、本当の事を話したら夫はどんな反応をするのだろうか、『何？チューインガムがどうした？』の一声から始まり、それが不愉快な話題だと知ると怒り出すにきまっている。それなら夫の機嫌のよい時を見計らってゆっくり話すことにしよう。良い話は早めに、嫌な話は遅めにって母が言っていたもの…と自分に言い聞かせ、電車に乗った。

電車を降りると急に空腹感に襲われた。駅に隣合ったファストフード店でサンドイッチとコーヒーを注文した。ふと気づくと右の靴に付いたガムは幾らか土埃をかぶり、さっきよりは目立たなくなっていた。横着で無造作な行為の代償のなんと大きいことかとつくづく思った。

窓越しに見える花屋の店先をラベンダーやサルビアが彩っている。暮れ色がかった花の庭で初夏の花々がどんなにか私の水遣りを待っていることか。

二杯目のコーヒーを飲み終えた頃には、さっきまで疎らだったはずの客席がほぼ満席になっている。スーパーの駐車場に置いたままの車も営業時間内に引き取りに行かなければならないのだが、何しろ鍵が無いのだ。

約四時間あまりをモタモタしてしまった。財布やスマホを失くしていなかったことはせめてもの幸いだった。

スマホの電池の容量も間もなくアラームの色が赤になりそうである。ひとまず家に電話を掛けた。夫は不在だった。念のため五分ほどしてまた掛けてみたがやはり出ない。こんな時、夫が携帯電話を持たないことの不自由さをつくづく感じる。

タクシー乗り場には客が三人並んでいた。バス乗り場ではバスが動き出す気配である。夫が帰っていることを期待し、バスに乗った。

庭先で両手に荷物を持ち、汗を噴き出している私を見て夫は目を丸くしている。

「私も今帰ったところだよ。ほら入院している克ちゃんの容態が急変したって清ちゃんが来たもんだから一緒に病院に行ってたんだよ。ま、今のところ落ち着いているようだったけど。お勝手の鍵が開いてたからいったん帰ってまた出かけたのかと思ったよ。車は？」

矢継ぎ早の夫の話を聞きながら私は胸騒ぎを覚えた。

車は調子がおかしかったのでディーラーに預けたと聞くと、夫は畑の水遣りを始めた。戸締りには

人一倍うるさい夫が私を咎めなかったのは、最後に家を出たのが私ではなかったと思い出したからであろう。

勝手口から土間に入ると、部屋に続く引き戸とノブ付きの戸がどちらも全開になっていた。ふだんはありえないことである。居間に入ると胸騒ぎは的中した。やっぱり空き巣が入ったのだ。フローリングの土を私の足裏が捉えた。

オーディオボードの上に置いた黒い貯金箱がなくなっていた。電話台の下の引出しが開けられ、来週末、仙台に行くための費用二十万円を入れた封筒も消えていた。

黒い貯金箱は片手では持てないほど重くなっていた。缶切りで蓋を開け、額を数えたのは昨日の昼のことだった。五百円玉が殆どだったが、小さく畳んでこじ入れた万札も足すと五十九万九千五百円。今朝その缶に夫が五百円玉を入れ、六十万ちょうどにした。それをそのままオーディオボードの上に置いたままにしたのは私だった。

落ち着かない夜だった。

充電台のスマホのアラームランプが青になり、コードを外したとたん着信音が鳴った。電話だった。

「もしもし」

の声に聞き覚えがあった。交番に食料品の袋を届けてくれた女性からだった。少ししゃがれた声に特徴があった。

「あのう私昼間お電話頂いた松田ですが、ちょっと気になることがありまして…」

私は彼女の話に耳を澄ませた。

側溝の穴に入って流されたとばかり思っていたポーチが実は蓋の近くに落ちていて、それを拾ったのは男女の二人連れだったということ、その二人連れが袋をうっかり置いたままにしたのかと思い、それを持って追いかけたがすぐに見失ってしまい、仕方なく交番に届けたということなどを松田さんは訥々と話した。

昼間、お礼の電話をした時、「…私が届けたのはあの袋だけですから」と言った松田さんのひと言は確かに耳に残っていた。

「えっ、どういう意味ですか？」と、あの時尋ねていればその後の私の行動は変わっていたに違いな

い。夫の在、不在にかかわらず家に帰り、少なくとも空き巣の被害は防げたはずだったのだ。
改めて私は松田さんにお礼を言って電話を切った。
営業が終る前にスーパーに電話を入れ、明日まで車を置かせてほしい旨を話す。続いて鍵の専門業者に電話すると明日、見積もりに来てくれるという。場合によっては施工もできるというのでピッキング防止付きの鍵を玄関と勝手口の二か所に取り付けてほしいと頼んだ。夫は明日競馬場に行く日なのでちょうどよい。
財産などと言えるものは何ひとつない。宝石類もひとつとて無い。盗まれてもどうということのないがらくたばかりだが、ただ留守中に見知らぬ者に侵入され、土足で物色されるなどとはもってのほかである。
拾ったポーチに住所のわかるものと家の鍵が入っていたとすると泥棒稼業では無いにせよ悪心が働くのかもしれない。
もう二十年近くも前、娘の誕生祝に隣町にあるカニ料理の店に行き、そのあとボウリングをして夜の十時頃帰宅したら、窓の戸が一か所だけ開いていてそこから空き巣に入られたことがあった。近隣でも空き巣の被害が噂されているちょうどその頃だった。息子が入学祝にと叔父から買ってもらったばかりの何段ギア付きとかいう高級自転車は一週間後に盗まれた。全部で自転車は四台、何れも施錠していたのに盗まれた。そのたび被害届は出したが出てこなかった。バイクも盗まれた。バイクは連絡があり引取りに行ったが改造されてしまっていて、使用者の私は電柱にぶつかり大怪我を負った。

そういえばファストフード店でコーヒーをおかわりせずに早めに帰宅したら賊と鉢合わせしたかもしれないと思うとぞっとした。
良い話は早めに、嫌な話は遅めに…これまでもそうしたように、夫に詳しい話はしないことにした。
翌朝、私はスペアキーを持って三つ隣の駅まで行き、スーパーに置いた車を引き取り、競馬場へ行く夫を駅まで送った。
家に戻ると白いワゴン車で鍵の業者が着いていた。ピッキング防止付きの鍵が新たに玄関と勝手口に取り付けられた。標準のものだが六万ちょっとを請求された。

昨日の失態はこうしてひとつひとつ繕ったが、秘密裏に事をすませている事への罪悪感はつきまとう。
賊が侵入したのが昨日の今日だけに、夫には早く帰宅してほしかったが事情を知らない夫は暗くなっても帰らなかった。
八時が過ぎ、十時が過ぎた。
電話が鳴ったのは十二時少し前だった。
「あのさあ、放蕩息子が来たんだよ」
「？」
「電話したんだよ、二回。出なかったから飲んできちゃったよ。店の娘が若くて可愛いくてさあ。山形出身だって言ってたなあ。たまにはいいでしょ？」
「いいよいいよ」

部屋に入るや否や夫は私の掌に一万円札の束をバサッと載せた。どうしたのこれ？
「だから言ったでしょ、放蕩息子が来たって、これはあなたにあげる。私が持っていてもろくなことはない。どうせ、あぶく銭！あぶく銭！」
と酔眼をしばたたかせながら言うと夫はソファに沈んだ。八十八枚あった。私は、夢を見ているような気がした。明日になったらこのお金は木の葉に化けているのだろうと思った。
放蕩息子は『ホウトウムスコ』で競走馬の名前だと翌朝知った。朝になっても八十八枚の一万円札はそのままだった。

完